

ビギナーズラック

松戸市 伊藤幸久

東関東傾聴ボランティアグループの仲間とともに、高齢者の傾聴ボランティア活動に取り組み伊藤幸久さん。
伊藤さんを傾聴ボランティア活動に向かわせた鮮烈な記憶とは……。

今までで一番幸せ

私には傾聴ボランティアを志すようになった鮮烈な記憶がある。

平成21年に新松戸で養成講座を受講し、将来、仕事をリタイアした後は、カウンセリング関係でボランティアとして地域に貢献できたらとぼんやりと考えていた。しかし、どのような形で貢献できるのかが見つけられないでいた。

そんな時、東京支部に『高齢者にエネルギーを与えるかわり方』講座があるのを知った。特別養護老人ホームで傾聴ボランティアの実践ができるというので、気持ちが高揚した。それが4年前の平成25年夏のことである。私のようにカウンセリングの実践の場を持たない者にとっては、本物の現場でクライアントに直接触れることのできる貴重な講座である。

訪問したH荘は、古い歴史を持つ3階建ての特別養護老人ホームで、1階が認知症の程度が重く、上の階に行くに従って軽くなる。

私にとって、養護施設を訪問することも、認

知症の高齢者に接することも初めての経験であったが、どうせならと、重度の認知症の高齢者のいる1階にチャレンジする。

ガイド役はいない。ぶっつけ本番である。

1階の4人部屋をのぞく。そこで、ただ一人起き上がって、ベッドの端に腰をかけてぼんやりとしている女性と目が合った。年齢は80歳代だろうか。それがBさんであった。他の3人はぐったりとしてベッドに横たわっている。「ちょっとお話を聞かせてもらってもいいですか」と尋ねると、「どうぞ、どうぞ」と自分の座っている狭いベッドの横に無理やり私を座らせようとする。

「どんな話が聞きたいの」と言われ、「昔の思い出でも、どんなことでもお話されたいことをお聴かせください」と答える。

Bさんは東北の貧しい農家の出身。4人兄妹で、父親は戦地で亡くなっている。生活は苦しかったようだ。

「兄の写真を見せてあげる」と、引き出しを開けて写真を探すが見つからない。「またの時



平成27年大晦日に2代目の愛犬を亡くし、もう2度と同じ悲しみを味わいたくないと夫婦で決意したつもりが、1周忌を過ぎ、3代目を飼ってしまった。

でいいですよ」と言っても、「今見つからないければ、もう出てこない」と必死になって探そうとする。引き出しの中には、手鏡とヘアブラシ2本と爪切りがきれいに並べて置いてあったが、他には何もない。

結局、写真は見つけれなかった。Bさんの両手の爪には真っ赤なマニキュアが塗られている。「とても可愛いですね」というと、「ここ（施設）に来てからは、何も食べさせてもらっていないので、爪が伸びないの」と訴える。幼い頃、父親に「人間は少しくらい食うものを食わなくても死にはしない」と口癖のように言われたが、その通りで、「今は、何も食べさせてもらえないのに生きている」と訴える。と言っても、その言葉に、恨みがまさはまったく感じられない。

「どんなものが食べたいの」と尋ねると、子どもの頃食べたさつま芋やカボチャ、栗や干し柿の思い出を話し始める。しかし、また、「ここでは何にも食べさせてもらっていない」と訴える。

東北出身ということで、東日本大震災に話題を振ってみたが、関心を示されない。ただ、子どもの頃、川が氾濫して、馬が生きたまま流されて悲しかった、という想い出を繰り返し話される。

1時間ほど傾聴したが、同じ内容を繰り返して語られ、4回ほど話がループした。しかし、だからといって私にとって少しも嫌な感情はおこらず、むしろ、心から、Bさんのすべてを無条件で受け入れたいという、いとおいしい感情が湧いていた。

最後になって、お別れの挨拶をすると、「この部屋では誰も話しかけてくれないので寂しい。でも、あなたが来てくれたおかげで、今までで一番幸せになれた」とのありがたい言葉を頂戴した。

私には、認知症の高齢者のお話を聴くという傾聴ボランティアが本当に意味のあることなのか、と疑問を持つての参加であった。最後のところで「あなたが来てくれて、今までで一番幸せだった」と言われて、「ああ、人の役に立つというのは、こういうことなのか」と、むしろ、自分の方が幸せな時間をすごさせて頂いたという感謝の気持ちが出て、喜びの感情が湧いてきた。私にとって、初めての傾聴ボランティア体験が素晴らしい至福の時間となった。

純粹に他人から必要とされるというひと

しかし、その体験がすぐには傾聴ボランティア活動につながらなかった。仕事が、日々ハ

ドで忙しいことを口実にしているうちに、その時の感動もしばらくして色あせていった。しかし、Bさんのことは頭の片隅で気になっていた。そこで、3年経った平成28年の夏にもう一度同じ講座を受け直すことにした。

果たして、Bさんは存命であった。前回訪問した時と同じ1階の部屋の奥の窓際のベッドに横たわっていた。明かりがついていたので、お声をかけるとうつすらと目をあけられた。「また、お話をうかがいにきました」というと、軽くうなずかれた。3年前にこんなお話をしましたね、と言うと、「覚えていますよ」と答

えがかすかに返ってきた。ただ、ベッドに仰向けに横たわったままで、入れ歯もなく、言葉がほとんど聴き取れない。本当に覚えられていたかわからないが、以前こんなことをお話しましたね、としばらくお話しをしているうちにBさんの顔に生氣のようなものが甦ってきて、一生懸命、私に何かを伝えようとする。ただ、私には何を言っているのかほとんど聴き取れない。床にしゃがみこんで、耳を口元に寄せると、少しばかりの単語が脈絡なく聴き取れる。その言葉を打ち返しながらか、あとはもっぱら笑顔でうなずくだけである。何度も「うれしい」と言われる。それを聴いて私もうれしくなる。

前回は真っ赤なマニキュアを塗られた爪が印象的であったが、今回は透明なマニキュアがきれいに塗られていた。少し伸びた爪の先端が若い女性の爪のように丸く切り揃えられ

ている。指先に特別なこだわりがあるのかもしれない。手を握って、「指がとてもお綺麗です」と言くと、顔中に喜びが広がってくる。ほとんど、言葉でのコミュニケーションは成立しなかったが、気持ちはつながっていた。ただひたすら感情だけをつなぎ合わせる傾聴もあるのだということを感じさせてもらった。

たまたまこの日は台風の影響で風雨が強く、傾聴を始めると、雷鳴がバリバリと窓ガラスを震わせる。窓際のベッドに横たわっていたBさんは、そのたびにビクッとおびえた表情をしたが、「私がついているから大丈夫ですよ」と言うと、本当に心から安心された表情になる。そしてこの時、私自身がこの瞬間に居合わせることでできた幸せを感じた。純粹に他人から必要とされるということは人としての生き甲斐であると思えた。

相手を受け入れながら聴くことの心地よさ。傾聴ボランティアには、一般的なカウンセリングでは得られない、傾聴させてもらう私たち自身にも得るものがたくさんあるということを実感した。

もし、初体験でBさんとの出会いがなければ、私はいまだにボランティアの在り方を見つけれないでいたかもしれない。その意味で傾聴ボランティアの最初にBさんにお会いできたことは私にとって幸せな「ビギナーズラック」であった。そして今、私はそのビギナーズラックのお裾分けを一人でも多くの方にさせていたきたいと願っている。